高知学園大学・高知学園短期大学紀要　第56号（2026）：105－118

報告論文

研究授業「解読」――日本人英語教師たちの語り――

太田　直也[1]，ジェラード・マーシェソ[2]

要約：研究授業は、日本の教師の専門的能力開発の中心的な要素のひとつであり、過去20年間に世界中でますます注目されている。世界の研究者たちはこの実践を称賛しており、日本は国際協力機構（JICA）などを通じて、さまざまな地域に研究授業を「輸出」しようとしている。本論文は、３人の外国語指導助手（ALT）と３人の日本人教師へのインタビューデータを比較・対照した、語りの調査である。日本人教師は研究授業を肯定的に捉えている一方、ネイティブの英語教師は否定的な見解を持っており、この点で先行文献との矛盾も生じている。本稿における語りから、３つの大きな事柄が浮かび上がってくる。まず、教師が研究授業に個人的に関与していると感じれば感じるほど、その潜在的な影響力は大きくなるということである。第二に――これまでの文献ではあまり取り上げられてこなかったことであるが――実践経験から明らかになった研究授業の限界があるということである。最後に、国際社会は研究授業に大きく貢献しており、日本はこれを実践に組み込むことを検討し、他国で研究授業を推進する際にはこのことを認識すべきということである。

キーワード：研究授業、外国語指導助手、日本人教師、大学附属学校

１．背　　景

１．１　研究授業

日本の教師[1)]たちが学校の同僚や教育委員会の指導主事、関心を抱いているコミュニティの人々などを招いて参観させる形式化・習慣化された授業がある。本稿においてはこれを研究授業と呼ぶ。個々の教師が授業研究[2)]の一環として毎年授業を公開することが求められているわけではないが、少なくとも毎年、同僚の研究授業を参観し、数年に一度は自らの授業を公開する。授業研究は学校、市、地域、国のレベルで行われる。経験の少ない教師が選ばれて授業をすることが多いが、ベテラン教師が研究授業を免除されるわけではない。教員養成課程に在籍する学生も教育実習の一部として研究授業に取り組む。

研究授業は様々な状況で行われるが、いくつかの共通点が認められる。まず、教師たちが時には数週間あるいは数か月にわたって、懸命に授業の準備をし、参加者に配布される綿密な指導案を作成するのである。研究授業終了後、ただちに授業検討会が行われる。大抵はまず教師が授業についてコメントし、続いて参観者が順番にコメントする。研究授業はカリキュラムの目標、国レベルで導入されたカリキュラムといったテーマに関わっていることが多い。これに関してはStigler and Hiebert（1999）、Lewis et al.（2009）、Lewis et al.（2019）、Marchesseau（2024）に詳しい。

[1] 高知学園大学　健康科学部　管理栄養学科　*Email: noota@kochi-gu.ac.jp
[2] 鳴門教育大学大学院　学校教育研究科

１．２　様々な先行研究

先行文献にはいくつかのパターンが見られるが、他の文化圏に日本独自の取り組みを持ち込むにあたっての適合性の問題が明らかにされている。研究授業は世界中に広まっており、文献では首尾よく行われた事例が記されてきた。しかし近年、研究者たちは教師の学びを明確に評価しようとし、さらに研究授業の有用性を実証しようとしてきた。

Fujii（2014）はウガンダとマラウイにおける試みを、この研究授業という慣習的実践についての文化的誤解による失敗例としている。ここでは、数学の授業において、教師がより探求型の、生徒主体のアプローチを採らず、正解を導き出す方法を指示しており、授業そのものが授業研究の一部と考えられていないと述べられている。そして、批判を向けられた時、教師たちは自らのエゴと教育実践及び授業計画とを切り離すことができず、授業検討会は喧嘩腰のものであったとされている。また、教師たちが活動を修正したり改善したりして後に使用しているとして、教師たちを批判している。しかし、研究授業はFujiiがウガンダやマラウイで見学したものよりも長期的にわたる専門的な成長を要するものである。

Marchesseau（2024）はFujiiの批判の多くが不当で事実に反するとしたが、長期的展望を持ち即時的な成果を期待しないことの重要性については、他の文献にも見られる（Stigler & Hiebert, 1999）。Ebaeguin & Stevens（2014）はフィリピンの教師たちに対してホフステードの６次元モデルを用いた調査を行い、研究授業に対する熱意のなさを明らかにしている。長期的展望なしに非現実的な即時的で測定可能な成果を望むことはフィリピンにおける研究授業の有効性を阻害するものと思われる。Lim-Ratnamet al.（2019）は、シンガポールにおける研究授業を調査し、同様に長期的展望を持つことが教育者たちが標準テストの点数の伸びという形での即時的成果を求めている、学習競争が激しい文化においては、容易ではない取り組みであったとしている。

研究授業の実施に向けた文化に関わるものとしてもう一つ挙げられるのは、日本以外の教育環境では研究授業に対する文化的枠組みがないということについてである（Lewis, 2016）。地方のレベルから国のレベルに至るまで、日本では研究授業が浸透している。この枠組みなしに研究授業という実践を基礎から作り上げようとするのは、困難である。

様々な課題があるにもかかわらず、近年、うまくいった研究授業の事例が多く見られる。例えば、Takahashi & McDougal（2016）はシカゴの30校における研究授業を調査した。成果は見られず、５校を除き全く実施されなくなった。しかし、協働的授業研究（Collaborative Lesson Research: CLR）として――すなわち、定義による制約を外されると――枠組みを変えられると、研究授業は首尾よく行われた。（日本においてすら単一の、強く制限された構成の研究授業はない。それゆえ、柔軟なアプローチこそが適切である）。重要な事であるが、Takahashi & McDougal（2016）はまた、それが教育委員会からの教育に関する新しい指針に関わっていると、教師たちが常に研究授業に関心を持っていたことを明らかにした。この研究を利用して、研究授業は近年、ヨーロッパでも成果を上げて来ている（Bakker et al, 2022; Uffen et al, 2022; van den Boom-Muilenburg et al, 2022; Wothuis et al, 2020）。

近年、研究授業への関心は高い。研究の一つの流れは研究授業の観察や参与による教師の学びに関わっている。Dunken（2023）はグランデット・セオリー・アプローチを用いて研究授業に参加した教師のフィードバックを分析した。Takahashi & McDougal（2016）同様に、カリキュラム改編に関わっている場合に研究授業の効果は大きかった。Uffen（2022）はオランダにおける教育指導についてよく学んでいるとされる教師とあまり学んでいないとされる教師とを区別している。この区別を様々な変化に関連づけ、まず個人的に重要な意味を持ち、学びたいことと関係がある時に研究授業が教師のより一層の学びにつ

ながることが明らかにされた。教師の学びに焦点を当てつつ、Vermunt et al.（2023）は、アンケート調査の因子分析により、３つの学びのパターンを明確にした。質的研究では、Kagar et al.（2022）が授業検討会における談話を質的に分析するコーディングシステムを考案した。上記の研究が研究授業の効用を測定するだけではなく、今後の研究にテンプレートとテクニックを与えていることは指摘しておかねばならない。この種の研究の事例は日本では見られない。この研究が近年の研究授業に関する唯一の事例となる。Lewis et al.（2019）は広範囲にわたる先行研究を提示している。

１．３　本研究に直接関わる先行研究

本研究は以下にまとめる先行研究をさらに進めたものである。Marchesseau（2024）は３人の外国語指導助手（以下、ALT）へのインタビューを用いたナラティブ・インクワイアリーである。ALTは小中学校及び高等学校の日本人英語教師（以下、JT）の助手を務める、主として英語を母語とする助手である。狭義では、「ALT」は「語学指導等を行う外国青年招致事業（JETプログラム）」に参加する外国語指導助手という職名であるが、この職名は現在ではより広く用いられ、日本人ではない英語教師全員を指すことがある。大抵、ALTは若く、母国では教師の資格を持っていない。通常、契約は毎年更新されるが、期間はすべてで最大５年である。ALTは２～３年で日本を去るケースが多い。これについてはMcConnell（2000）、Marchesseau（2006）、さらには公的なウェブサイト（JET Program, n. d.）に詳しい。

Marchesseau（2024）においてインタビューを受けた３人のALTは、先行文献に見る肯定的な意見とは対照的で、研究授業に関して明らかに否定的な見解を持っていた。３人のALTの経験では、研究授業は準備過剰で台本が用意されたものであった。その授業は教師が普段行っているものではなく、現実的に日常の授業で繰り返すことができないものであった。教師たちは入念に事前練習された、時流に乗った手法を実演するが、翌日には以前通りの教え方に戻る。事後検討会も事前に決められた形式と手順で進められているように思われ、時として建設的な批評というよりもいじめに近いものに見える。通例、このプロセスは真に有益あるいは信頼できるものというよりも、「パフォーマンス」のように見える。

ALTのうちの一人は大学附属の小学校に勤務しているが、附属学校に関する談話はLewis et al.（2016）における同種の学校に関する記述とは対照的であった。大学附属の学校（以下、附属学校）は、正確に言えば、公立学校の一部であるが、大学が運営しており、入学志願者は入学試験を受験する必要がある。したがって、附属学校はより大きな集団を代表しているわけではなく、そこでの教育方法は他の公立学校では効果的でない可能性がある。教師たちも必ずしも優れた指導力に基づいて選ばれているようには思えない。彼らは公立学校の教師というより広い集団から選抜され、数年に一度、附属学校への異動や転出を繰り返している。異動には様々な基準が影響しているようだが、優れた指導力は主要な要素ではないように思われる。教師が数年おきに学校を異動することは、一般的な慣行である。通常、教員はこうした異動に関して発言権を持たないが、原則として附属学校への異動を拒否する権利は有している。一部の教師は附属学校を名門と見なすかもしれないが、大半は勤務時間が大幅に長いことを理由に、そこで働きたがらない。附属学校の現状と地域社会における役割は、Lewis（2016）が示すものよりも複雑である。

Marchesseau（2024）は研究授業に関する国際的な研究と実践が過去20年間で著しく進展しており、日本が自らのものとする分野において存在意義を失わないためには、こうした動向に遅れを取らないよう努めるべきであると提言している。ただ、この論文はALTからの報告への依存が大きかった。ALTは常勤職員として都道府県教育委員会に雇用されているわけではなく、日本語や日

本文化に関する知識が限られた状態で来日することが多い。さらに、彼らは学校ではしばしばゲストとして扱われ、意思決定プロセスに積極的に関与していないのである。その結果として生じる疎外感は、研究授業に対する否定的な感情の一因となり得る。このインタビューにおけるALTたちが過去の文献には見られなかった研究授業に関する重要な問題を提起したことは確かだが、この種の研究はJTたちの語りなしには不完全であると言えるだろう。本研究の目的は、ALTとJTの見解を比較対照することにより、研究授業に関するよりバランスの取れた見解を示すことである。その際、附属学校についても少しく見てゆく。回答者に附属学校勤務者がいること、附属学校が通常の公立学校と多くの点で異なっていることがその理由である。

2．方　法

本研究はインタビュー・データに基づき、JTとALTの研究授業に対する認識を比較する。前節ではALTインタビューの結果を概説した。本節では主として日本人参加者のデータに焦点を当てる。

2．1　回答者

ALT回答者１名は附属学校で勤務していた。他の２名は公立学校で勤務し、うち１名は過去20年間、高等教育機関で勤務を続けている。代表的で大局的な見解を収集するため、有意抽出法によるサンプリングを実施した。詳細はMarchesseau（2024）に記されている。

３名のJTも有意抽出法を念頭に置いて選定された。Ｆ先生は過去10年間、附属中学校で勤務している。教歴は20年で、これまでに３つの公立中学校で教鞭をとってきた。なぜ附属学校に転校したのかとの問いに対して、彼女は、１年間のアメリカ合衆国留学に選ばれ、帰国後、彼女の学校の校長が附属学校への転校を提案したのだと答えた。通常、教員は附属学校への異動を拒否できるが、彼女は留学の機会を与えられたため、断れない申し出だった。Ｆ先生は、筆者らと緊密な協力関係を築いており、率直で誠実な回答が得られると考えられたため、回答者として選定した。日本のような文脈依存度の高い社会では、フィルターのかかっていないインタビュー・データを収集することはしばしば困難であり、この点を考慮して回答者（ALTとJTの両方）を選定した。附属学校からの回答者を含めることも重要であった。これは文献とALTデータの両方に共通するテーマだったからである。

２人目の回答者であるM先生は、現職の小学校教員であり、現在、大学院で研究を進めている。約15年に及ぶ教歴は全て公立小学校の教育現場において積まれたものである。彼女もまた、１年間、授業や課外活動（海外研修を含む）への参加を通じて、筆者らがよく知るようになったという理由で選定された。ごく一般的な言い方をすれば、彼女は「典型的な」小学校教師と言えるだろう。Ｆ先生とM先生は、キャリアを通じて研究授業を数十回にわたり観察者として経験し、選ばれて自ら研究授業を実施する機会も10回近くあった。

３人目はＯ先生で、約30年間大学教員を務めている。大学では通常FDの一環として行われる以外、研究授業は行われないため、自身で実施したことはないが、約30回の研究授業を観察してきた。これらの多くは教員養成課程の学生を対象としたものだが、彼はあらゆるタイプの研究授業について豊富な経験を持つ。彼が選ばれたのは筆者らの個人的な友人であるためであり、それゆえ彼の回答が誠実なものになると確信していた。また彼は多数の人々とは異なる意見を持つことがある。彼の記述データからは、他の参加者たちが表現しないかもしれない研究授業の側面が明らかになるかもしれないと考えた。なお、参加者の匿名性を守るため、名前は変更されている。

2．2　インタビュー

インタビューはすべて、形式ばらないものでありながら体系的なアプローチで実施され

た。ALTデータの詳細についてはMarchesseau（2024）に述べられている。JTにはまず研究授業に関する経験を記述するよう求めた。その後、回答に基づいて補足質問を行なった。例えばF先生は研究授業で生徒の英語力と自身の教師としての能力の両方が向上したと述べた。インタビュアーは「教師の能力をどのように向上させるのか」と問い、さらなる情報を引き出そうとした。インタビュー全体のアプローチは、回答者を誘導したり個人的な偏見を露呈したりすることなく、可能な限り多くの質的データを収集しようというものであった。とはいえ、ALTの報告や文献と比較対照するためのいくつかの点に関わるデータの収集は重要であり、LSの授業前の準備・リハーサルの量、および通常の授業との類似性（あるいは非類似性）が語られた。回答者には附属学校における研究授業についても質問し、地域社会における附属学校の一般的な役割についても尋ねた。O先生とM先生は、いずれも附属学校で研究授業を観察しており、F先生は、前述の通り、その学校の教諭であった。インタビューの後半15分間に、ALTに対しても同様のインタビューを実施しており、彼らがLSに対して抱く印象が明らかに否定的であったことが回答者に伝えられた。インタビュアーは、ALTには様々な偏見があるかもしれないと述べた。JTにはALTの見解との対比またはバランスを取るための、さらなるコメントを提供するよう求めた。

2．3　分析

インタビューはそれぞれ約45分間行われた。すべてのデータを記録し、テーマ分析のために書き起こした。コーディング法が検討されたが、コーディング技術を適用するとデータが圧縮される傾向がある。ここでのデータは正確な要約とするには十分な大きさであり、コーディングという体系的な手法によって意味のある結果を得るには十分ではない大きさと判断された。

3．結　果

ALTの結果についてはMarchesseau（2024）で既に詳細に論じられているため、本節ではデータを簡潔に要約する。本節では、インタビューのテーマを説明する抜粋を付し、日本人教師へのインタビューのより詳細な要約を記す。ALTと日本人教師のデータは、考察のセクションで比較対照する。

3．1　F先生

F先生は、研究授業が教師の指導力と生徒の英語力の両方を向上させるのに非常に効果的だと認識している。研究授業では、日常の授業では行わないレベルで、指導計画と授業の進め方を慎重に検討する必要がある。研究授業が教師の能力をどのように向上させるか尋ねられた彼女は、次のように述べている。

> 多くの学習計画を確認し、指導方法についても考えなければならないからです。また、実践授業の前に、他のクラスで３回ほど練習の授業を行います。研究授業を行う前に、他のクラスで研究授業を練習するのです。

研究授業は基本的に授業を顕微鏡の下に置くように、通常の状況では観察されない教師と生徒の対話における様子を明らかにする。F先生は「準備に時間がかかる」ため「模擬授業は頻繁に行いたくない」と明言しているが、頻繁に研究授業を自ら進んで行う別の先輩教師については非常に好意的に語っている。その教師の研究授業への関心をこう説明している。

> この学校の数学教師は７回も練習しました――別の学年の生徒を使って。彼には練習が必要なのです。生徒が質問にどう反応するか確認する必要があるのです。彼はベテラン教師で、研究授業が大好きです。とてもアクティブなんです。自発的にLSをしているのです。

その教師は研究授業を教えるのがあまりにも楽しく、自分のクラス以外の授業でも実施したいと申し出た。Ｆ先生の声には熱意がにじんでいたが、明らかにこの教師は例外的な存在である。生徒にとっての利点は、研究授業がもたらす生産的なプレッシャーにあると思われる。Ｆ先生は、通常の授業では生徒中心のコミュニケーション活動を行っているが、海外からのゲストが訪れる研究授業中や、実社会と結びついた具体的な目標を持つ授業課題を行う際には、生徒のコミュニケーション意欲が常に高まると語っている。研究授業についてＦ先生は次のように述べている。

> 生徒たちが会話の授業を楽しんでいると感じました。通常の授業では難しいのです。参観者がいる場合、その先生方が生徒の活動や雰囲気を見るからです。でも、その学校の生徒はLSを楽しんでいます。生徒たちがよりアクティブになるので、パフォーマンスが良くなるのです。

Ｆ先生には、附属学校の生徒たちが研究授業の授業において、自らのコミュニケーション能力を誇示しようという動機が非常に強く、公立学校では同様の効果が見られないかもしれないという含みもあるようだった。

附属学校が地域におけるリーダー的存在であるかどうかを直接尋ねたところ、Ｆ先生は「まあ、そうですね。リーダー校の一つです」と答えた。しかし、教諭の多くが附属学校の考え方に敬意を払っているのかと尋ねると、「中にはそういう人もいますが、多くはないです」との返答があった。それを示す好例として、この附属学校は研究授業の開催を全国に広く知らせたのであるが、参観者はせいぜい10人で、他県からの参観者はわずか２，３名にすぎなかった。この事実は、附属学校に関するLewis（2019）の報告と一致しないようである。

研究授業に対してALTが持つ批判的な見方をＦ先生は持っていなかった。研究授業が効果的であるならば、それは日々の実践で教諭・教師たちが懸命に求める（探究する）理想を表している。問題は研究授業が通常の授業を表すものではないということではない。通常の授業が研究授業の水準に達していないことである。Ｆ先生は次のように語った。

> 一番悪い点は、通常の授業と研究授業との違いです。私たちは英語の授業では毎回、研究授業のような授業をすべきなのですが、多くの日本人英語教師は文法訳読をするのです。

３．２　M先生

LSに対するM先生の肯定的な見解はＦ先生と同様のものであった。英語が教科として小学校に導入された時、教諭の多くは戸惑ったが、同僚の行っていることを見ることが方向性を見出すのに役立った。

教諭にとっては負担が大きく、M先生が自ら進んで研究授業を担当することは稀であるが、教諭と児童双方にとって貴重な能力向上の機会であると捉えている。インタビュー全体を通じて、研究授業の困難ながらも有益な面が強調された。

> 研究授業を行うときはプレッシャーが大きいです。果たして自分にできるのだろうかと思います。どうなるのか不安になります。でも、自分の専門的成長につながっていて、意味のあるチャレンジだと思います。

児童たちも研究授業の恩恵を受けている。児童たちは見られていることに緊張することが多いが、反応は概ね好意的だとM先生は述べている。「道徳」の授業に関連させ、研究授業はしばしば一連の授業の集大成であると彼女は語る。研究授業の授業に至る過程で、彼女は「子どもたちの感情や目つき、心、考え方に大きな変化が見られる」ことに気づいた。研究授業は観察者にとっても有益である。特にカリキュラム改編時には、教授法やアプローチの具体例を提供し得る。

筆者らは、ALTの報告で指摘されたいくつか

の問題について触れたいと考えた。振り返りセッションについて尋ねられた際、M先生は概して生産的だと感じていた。３人のALTのうちの１人であるＶ先生は、授業検討会が不必要に批判的になり得ると指摘したが、M先生はそれらを主に肯定的なものと捉え、次のように述べた。

ほとんどは肯定的な内容ですが、参観された先生方の中には厳しい指摘をされる方もいます。あまり頻繁ではなく、私は何か厳しいことを言われたことはありません。悪意のあることは言われませんし、大抵はアドバイスをくれます。

ALTたちはまた、研究授業が事前に生徒とリハーサルされる可能性を示唆した。M先生は即座にそれを否定した。「いいえ、それは許されていません！ それでは意味がありません。単なるパフォーマンスになってしまいますから」。しかし、Ｆ先生と同様、彼女は参観者の前で授業を行う前に、異なる生徒たちで研究授業の授業を実践している。これは一般的な慣行であるように思われる。

附属学校が地域社会におけるリーダーと見なされているかとの問いに対し、彼女は「ある程度はそうです」と答えたが、同時に附属学校と通常の公立校との違いを強調し、それが両者の関わりを制限していると述べた。

おそらく、附属学校はリーダーだと思います。でも附属は附属で、公立校は公立校です。別物なのです。生徒層も違う、環境も違う、試験内容も違うと思います

M先生は、かつての同僚が附属学校で行った研究授業について話を続けた。その授業に費やされた膨大な準備作業に感銘を受けつつ、必要な準備量の多さから通常の状況では現実的に再現できないと述べた。さらに、附属学校では業務負担が重いため、自分はそこで働きたくないと明言した。

インタビューで浮かび上がったもう一つの重要なテーマは、研究授業が年月を経て進化してきたという点である。彼女は同じ生徒で授業をリハーサルしていたことをきっぱりと否定したが、過去にはそうしたことが行われていた可能性があると述べた。近年の一般的な傾向としては、研究授業がより通常の授業を反映するものとなっており、通常の条件下で再現しやすいものへと変化している。

私も以前は研究授業に対して全く異なる見方をしていましたが、最近は変化が見られ、教師たちが他の人でも再現可能な授業を見せ始めています。以前は、多くの授業が現実的ではなく、他の状況では再現できませんでした。しかし最近では、授業がより自然なものになってきています。そうでなければ意味がないでしょう？誰も真似できないような授業なら、意味がないです。

ALTの否定的な見解が提起された際、彼女はそれが彼らの授業に至るまでのプロセスへの関与不足に起因する可能性を示唆した。彼女は次のように説明する。

彼らは授業に至るまでのプロセスを知っているのでしょうか？ その人がどの程度関わっているかによるでしょう？ もし皆で一緒にそのプロセスに関わっていたなら、そうは言えないと思います。もし最終授業にゲストとして参加しただけなら、そう思うかもしれませんが、ここで私たちが何をしようとしているのかを明確にわかっていれば、そうは言えないと思います。

３．３ Ｏ先生

Ｏ先生の見解は他の日本人教師たちとは対照的である。彼は研究授業における建設的な例を認めつつも、その実践を躊躇なく批判する。彼は研究授業の見せかけで練習された側面がその効果を制限する様子を次のように述べる。

まぁ、研究授業も悪くはない。でも時々、まったく意味がないと思うのです。授業を見せる前に、先生たちはその授業を一度やってしまうからです。ただ、より良い授業を見せたいだけなのでしょう。同じ授業を一度やって、また繰り返す。他の先生たちに「こんなことをやってるんだ。私は良い先生だ！」と見せつけるためにそうしているように見えます。

しかし、M先生と同様に、O先生も研究授業が進化していることに気づいている。

ただ、最近は状況が変わってきているようです。授業の前に以前ほど練習しない。今ではリハーサルが減ったようです。それは良いことです。授業前に大掛かりな準備をするべきではない。準備しすぎると子どもたちにとって良くない。参観者にとっても良くない。ただ現場を見て学びたいのですから。児童・生徒たちの自然な反応を見たいのですから。

彼は「うまくいけば良いのだが、問題は実践の仕方だと思います」と総括した。O先生のLSに対する賛否両方の評価は、インタビュー全体を通じて一貫していた。彼は、振り返り会議は有益になり得るが、参観者はしばしば批判的洞察に欠けるか、あるいは自らの優越性を示唆するかのように過度に批判的になる傾向があると示唆している。授業後の検討会について彼は次のように述べている。

時として、とてもナンセンスなのです。参観した教師も聴衆も、授業を行った教師を褒めちぎる。「素晴らしい！」と。そんなものは必要ないのです。

参観した教師が批判的すぎることはあるかと尋ねられると、彼はこう答える。

もちろん。批判的すぎることがあります。皆が静かにしている中、ある人がただ一人文句を言っていることもありました。私は、彼が自分を良い教師だと見せたいのだろうと思いましたね。まぁ、それは珍しいことですが。一度や二度ではないけれど、頻繁にあることではないです。

全参加者に附属学校について質問したが、これに関して、O先生は最も批判的であった。O先生が回答者として選ばれた理由の一つは、彼の反権威主義的傾向にあった。筆者らはこの偏見を承知していた。意図的サンプリング法は、LS（および附属学校）に対するやや異なる見解が反映されるよう、意図的に実施された。O先生は幼少期に附属学校に通い、大学教授としての立場で複数の附属学校を訪問または協力してきた。彼は附属学校の児童・生徒たちが大人を感心させる方法を習得する様子を説明しながら、笑った。これは研究授業のパフォーマンス的側面を反映している。彼は附属学校が日本全国で画一的な文化を持ち、児童や保護者の間に優越感を育んでいると述べる。教師の立場から見ると、かつては附属学校のポストを渇望する者もいたが、時代が変わるにつれ、附属学校の業務量が大幅に増加したため、公立校の教師はそうした学校で働きたがらなくなったとも語った。彼の見解は次の回答に要約されている。

腐っています！封建的なやり方で教師を働き過ぎに追い込むなんて。私のいた学校は、児童・生徒もろくでもなかったです。「良い家庭」の出身で、自分や家族をすごく誇りに思っているんです。それは、ある意味とても良いことでもあるのですが。私の通った学校は行き過ぎていましたね。私の父は学校の教諭でしたが、クラスメイトの親の多くは医者、弁護士、教師、公務員みたいな人たち。一種の「上流社会」でした。ああいうのは良くないと思うのです。教師の中には「附属学校の一員であることを誇りに思え」と言う人もいました。そんなの、おかし

いでしょう！

4．考　察

ALTとJTの研究授業に対する認識の類似点と相違点をまとめると次のようになる。

類似点：
- ・パフォーマンス的で、時に窮屈
- ・附属学校は地域や学校を代表してはいない
- ・附属学校に対する否定的な見解
- ・附属学校の限定的関係性
- ・附属学校では教師は過労働
- ・授業検討会はエゴに関わって、時として過度に批判的
- ・教師の仕事が非常に多い

相違点：

ALT
- ・研究授業に対する否定的な見解
- ・パフォーマンス的な側面による制限
- ・リハーサルのためパフォーマンス的で不誠実
- ・より現実的な授業が望ましい
- ・研究授業は変化が少ない
- ・研究授業は混沌とした大騒ぎ
- ・授業検討会はパフォーマンス的
- ・日本人教師の過酷な労働環境に対する共感

JT
- ・研究授業に対する全般的に肯定的な見解
- ・パフォーマンス的な側面による良さがある
- ・リハーサルをするが、違うクラスで行う
- ・リハーサルによって教師は教えることに集中できる
- ・附属学校に対する中立的な見解
- ・研究授業は変化・進化している（より現実的になっている）
- ・授業検討会は一般的に建設的なものであり、過度に批判的ではない

ALTは研究授業を主に否定的に捉えた一方、JTは肯定的に評価した。経験豊富な公立校教諭２名は、研究授業を教員の専門的能力開発に不可欠な要素と捉えていた。一方、実際に研究授業を実施した経験がなく、先に指摘したように偏見を抱いている大学教授はより否定的な見解を示した。ALTたちは一貫して否定的な見解を示した。研究授業もその後の授業検討会も、内容より形式を重視していると感じ、その実践全体をパフォーマンス的と評した。明らかにALTたちは研究授業のパフォーマンス的側面を否定的に捉えていたが、Ｆ先生は参観者の前で「パフォーマンス」することを求められることが生徒たちに生産的なプレッシャーを与え、英語のアウトプットを向上させると感じていた。したがって、両グループとも研究授業がパフォーマンス的であることを認識しているが、その効果については意見が分かれている。

同様に、ALTとJTの双方が研究授業はリハーサルが行われると報告しているが、リハーサルの効果と程度については意見が分かれている。JTによれば、研究授業の前に他のクラスで授業のリハーサルを行うことで、教師は指導法や授業内容を磨き、研究授業の効果を高められるという。しかしALTたちは、授業が円滑に進み形式的な期待に沿うことを保証するためだけにリハーサルが行われていると考えているようである。ALTは、研究授業の前に同じ生徒グループでリハーサルが行われている可能性を示唆した。JTは、過去には行われていたかもしれないが、現在はそのようなことはないと回答した。研究授業には直接関わる者の多大な労力が必要であるという点で、意見の一致が見られた。JTはLSの有益性を認識しつつも、自ら進んで参加することを躊躇しており、ALTは日本人教師への同情を述べた。

３人のJT全員が、研究授業が年々変化してきていると考えている。研究授業は教師が通常教室で行う活動をより表す形になってきている。徐々に、研究授業の形式的な側面は緩和されてきたが、ALTたちはより固定的な研究授業像を示した。これは、長年にわたり研究授業についてより豊富な経験を有しているJTにより明らかにされうるかもしれない。この点はMarchesseau（2024）

で十分に論じられていなかった重要な点である。

インタビューからは、直接的な関与が研究授業に関する認識に影響を与えることが示唆された。最も肯定的な見解は、研究授業に豊富な直接経験を持つ２人の教師から寄せられた。ALTの経験は総じて研究授業自体と授業検討会に限定されていた。研究授業全体のプロセスは数週間から数ヶ月を要し、ALTは通常、計画立案やその他の段階に関与していなかったのである。Lewis et al（2019）は、動機付けの自己決定理論（SDT）が研究授業についての認識を説明し得ると示唆した。SDTによれば、動機付けは自律性、関係性、有能感によって駆動される（Sansone & Harachiewicz, 2000）。有期契約の補助教員であるALTは、しばしば関与と自主の欠如を感じている（Hiratsuka, 2022; Ohtani, 2010; Marchesseau, 2006; McConnell, 2000）。そしてこのことが、研究授業や職務の他の事柄に対するALTの認識に影響を与えている可能性がある。M先生はALTの否定的な体験談を聞いた時、「それは彼らが関わっていないからですよね！？」と述べたが、それに関連して、先行文献でも、研究授業が教師のおかれている状況に関連している場合に最も成功していることが示されている。ALTは研究授業自体に参加する場合でも、研究授業から距離を置き、JTが得るのと同様の感覚を受けていないように見える。ALTがより直接的にプロセスに関与すれば、彼らもその利点を理解し、認識が変わる可能性もある。しかし、ALTは複数の学校で勤務することが多いため、その職業上の立場の継続性が欠如しがちであり、それで研究授業のような取り組みへの深い関与が実行できなくなっているのかもしれない。

本研究におけるもう一つのテーマは附属学校であった。附属学校は地域社会のリーダーとして称賛されることもあるが、その評価については肯定的なものと否定的なものの両方がある。ALTたちは――特にそのうちの１校で働いていたＶ先生を中心に――附属学校に対する批判を率直に述べた。JTの意見はより複雑だったが、インタビューを総合すると、附属学校が地域リーダーとしての役割を果たす上では、少なくとも二つの制約要因が浮かび上がる。第一に、附属学校の児童・生徒たちは、多くの人々を代表する存在ではないということである。彼らは競争率の高い入学試験の結果、附属学校に入学する。これはエリート意識の醸成に寄与し、学校内に独特の文化を形成している。このことは、附属学校に深く関わる者たちが痛感しており、インタビューでも明確に表れていた。附属学校は通常の公立校とは異なるし、一般化することはできないであろう。

第二に、附属学校の教諭が卓越した能力を持つ証拠は見つからなかったが、彼らが通常の学校の教員よりもはるかに長い労働時間を強いられているということである。彼らが研究授業に注ぐ労力は法外なほどで、他の教諭には現実的ではない。その実態はインタビューからも明らかであり、筆者らも直接目にしてきた。

５．結　論

本研究はALTとJTの研究授業に対する認識を比較してきた。ALTからの最初の見解は否定的なものであった。しかし、研究授業に関する研究は、この実践に対する関心が非常に高く、世界中の様々な環境で成功を収めていることを示しており、先行文献には説得力がある。さらに、JTへのインタビューはより包括的な見方を示し、この実践が教師に自身の指導の細部にわたっての集中を要求することで教師に利益をもたらすことを示している。学生やその他の参観者にとっての利点については詳しく議論されなかったが、おそらく研究授業の状況や目的に依存するだろうと思われる。例えば、新しいカリキュラムが導入された際、他の教師の取り組みを観察し、アイデアを共有することは、教育実践の発展に寄与する。

Marchesseau（2024）の結論のうち２点は、本稿においても同様であった。まず、研究授業に関する実践と研究は世界的に大きく進展しており、おそらく日本よりも進んでいる。本稿におけるJTは、研究授業が進化を続けており、形式が緩

和されるにつれて研究授業がより通常の授業に近いものになっていることを示している。しかし、海外の研究者はさらに踏み込み、研究授業の実施と研究のための具体的なテンプレートやツールを提案している。日本においては、研究授業はこうした進展から影響を受ける可能性があり、海外でLSを推進する日本の教育者は関連文献に通じていなければならない。Fujii（2014）が示唆するような段階的なアプローチは他の地域では適用されず、現在の日本で実践されているLSの代表例とは言えない。第二に、附属学校は通常の公立校を代表しておらず、公立校の教師もこの点をよく認識している。附属学校の教諭は必ずしも優れた技能を持っているようには見えないが、その業務量は著しく多く、おそらく持続不可能な水準にある。児童・生徒たちもまた、厳しい入学要件があるため、多くの児童・生徒を代表しているとは言えない。海外からの訪問者は附属学校を見学すると感銘を受けるかもしれないが、通常の公立校で時間を過ごすことで、日本の教育のより現実的な姿がわかる。

研究授業の発展・より良いあり方を求めるにあたっては、さらに多くの詳細な事例を踏まえた比較・考察等が必要となるが、稿を改めたい。

注

1）教員免許を取得し、各都道府県が実施する教員採用試験に合格した教員は、法的な正式職名として教諭と称される。しかし、本稿においてはALT、小・中学校教諭、大学教授等、多様な教師に対するインタビューを行ったため、一般的な職業名としてすべて教師とし、文中で教師個人を指す場合には先生とする。

2）本稿においては参観を目的として行われる授業を研究授業、その後に行われる会を授業検討会、それらすべてをまとめて授業研究と呼ぶ。

引用および参考文献

Bakker, C., de Glopper, K., & de Vries, S.（2022）. Noticing as reasoning in lesson study teams in initial teacher education. *Teaching and Teacher Education, 113,* 1-13. https://doi.org/10.1016/j.tate.2022.103656

Dunken, B. K.（2023）. Practicing teachers' perspectives on the purposes of mathematics lesson study. *Mathematics Teacher Education and Development, 25*(1), 1-22.

Ebaeguin, M., & Stephens, M.（2014）. Cultural challenges in adapting lesson study to a Philippines setting. *Mathematics Teacher Education and Development,* 16(1), 1-25. https://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ1046683.pdf

Fujii, T.（2014）. Implementing Japanese lesson study in foreign countries: Misconceptions revealed. *Mathematics Teacher Education and Development,* 16(1), 65-83.

Hiratsuka, T.（2022）. *Narrative inquiry into language teacher identity: ALTs on the JET program. Routledge.*

JET Program official webpage（Japan）.（n.d.）. http://www.jetprogramme.org/j/index.html

Kager, K., Jurczok, A., Bolli, S., & Vock, M.（2022）. "We were thinking too much like adults": Examining the development of teachers' critical and collaborative reflection in lesson study discussions. *Teaching and Teacher Education, 113,* 1-13. https://doi.org/10.1016/j.tate.2022.103683

Lewis, C., Perry, R. R., & Hurd, J.（2009）. Improving mathematics instruction through lesson study: A theoretical model and North American case. *Journal of Mathematics Teacher Education, 12,* 285–304. https://doi.org/10.1007/s10857-009-9102-7

Lewis, C.（2016）. How does lesson study improve mathematics instruction? *ZDM Mathematics Education, 48,* 571-580.

https://doi.org/10.1007/s11858-016-0792-x

Lewis, C., Friedkin, S., Emerson, K.T.U., Henn, L., & Goldsmith, L.T. (2019). How does lesson study work? Toward a theory of lesson study process and impact. In R. Huang, A. Takahashi, & J.P. da Ponte (Eds.), *Theory and practice of lesson study in mathematics,* (pp.13-37). Springer. https://doi.org/10.1007/978-3-030-04031-4_2

Lim-Ratnam, C.TL., Lee, C.KE., Jiang, H., & Sudarshan, A. (2019). Lost in adaptation? Issues of adapting Japanese lesson study in non-Japanese contexts. *Educational Research for Policy and Practice 18,* 263–278. https://doi.org/10.1007/s10671-019-09247-4

Marchesseau, G. (2006). Decoding lesson study: Narratives from assistant language teachers in Japan. In A.R. Gierhart (Ed.), *Inquiries of pedagogical shifts and critical mindsets among educators,* (pp. 27-51). IGI Global. https://doi.org/10.4018/979-8-3693-1078-6.ch002

Marchesseau, G. (2024). Decoding lesson study: Narratives. from assistant language teachers in Japan. In A. R. Gierhart (Ed.), *Inquiries of pedagogical shifts and critical mindsets among educators* (pp. 27–51). IGI Global.

Marchesseau, G. (2006). The state of the JET programme, team teaching and English education in Japan. *Journal of Naruto University of Education, 21,* 168-174.

McConnell, D.L. (2000). *Importing diversity: Inside Japan's JET program*. University of California Press.

Ohtani, C. (2010). Problems in assistant language teacher system and English activity at Japanese public elementary schools. *Educational Perspectives: Journal of the College of Education, University of Hawaii at Manoa 43*(1), 38-45.

Sansone, C. & Harachiewicz, J.M. (eds.). (2000). *Intrinsic and extrinsic motivation: The search for optimal motivation and performance*. Academic Press.

Stigler, J.W., & Heibert, J. (1999). *The teaching gap: Best ideas from the world's teachers for improving education in the classroom*. Summit Books.

Takahashi, A., & McDougal, T. (2016). Collaborative lesson research: Maximizing the impact of lesson study. *ZDM Mathematics Education, 48,* 513–526. https://doi.org/10.1007/s11858-015-0752-x

Uffen, I., de Vries, S., Goei, S.L., van Veen, K., & Verhoef, N. (2022). Understanding teacher learning in lesson study through a cultural-historic activity theory lens. *Teaching and Teacher Education, 119,* 1-13. https://doi.org/10.1016/j.tate.2022.103831

van den Boom-Muilenburg, S.N., de Vries, S., van Veen, K., Poortman, C., & Schildkamp, K. (2022). Leadership practices and sustained lesson study. Educational Research, *64*(3), 295-316. https://doi.org/10.1080/00131881.2022.2090982

Vermunt, J.D., Vrikki, M., Dudley, P., & Warwick, P. (2023). Relations between teacher learning patterns, personal and contextual factors, and learning outcomes in the context of lesson study. *Teaching and Teacher Education, 133,* 2-11. https://doi.org/10.1016/j.tate.2023.104295

Wolthuis, F., van Veen, K., de Vries, S., Hubers, M.D. (2020). Between lethal and local adaption: Lesson study as an organized routine. *International Journal of Educational Research,* (*100*). https://doi.org/10.1016/j.ijer.2020.101534

受付日：令和７年11月５日
受理日：令和７年12月15日

Bulletin of Kochi Gakuen University / Kochi Gakuen College, No. 56（2026） pp. 105-118

Report Paper

Decoding Lesson Study: Narratives from Japan

Naoya OTA[1], and Gerard MARCHESSEAU[2]

Abstract: Lesson Study is a central component of professional development for teachers in Japan that has received increasing attention around the world over the past 20 years. International researchers have praised the practice, and Japan has sought to export LS to various regions through the Japan International Cooperation Agency and other organizations. This paper is a narrative inquiry, comparing and contrasting interview data from three Assistant Language Teachers（native-English speaking teachers who assist Japanese teachers in English language classrooms）and three Japanese teachers. The Japanese teachers view Lesson Study positively, while the native-English speaking teachers have a negative view, which also contradicts the literature. Three broad positions emerge from the narratives. First, the more that teachers feel personally invested in Lesson Study, the greater its potential impact. Second, lived experience reveals limitations to Lesson Study that many previous accounts in the literature have not captured. Finally, the international community has made significant contributions to Lesson Study, which Japan should consider integrating into practice and be aware of when promoting Lesson Study in other countries.

Key Words: lesson study, assistant language teachers, Japanese teachers, university-attached schools

[1] Kochi Gakuen University, Department of Nutrition, Email: noota@kochi-gu.ac.jp

[2] Naruto University of Education Graduate School, Human Education